

# 経営と健康

第4回

## 日本超高層建築の父・郭茂林

講談師 一龍斎貞花

高さ制限31メートルから、日本最初の高層ビル、高さ147メートル、地上36階建ての霞が関ビルをはじめ、超高層ビルや新宿副都心を完成させた郭茂林。

霞が関ビルを視察した台湾の栄工、<sup>ズ</sup> 廠社長から「台湾にも高層ビルを建てたい」と相談を受けると、台北にKMG郭茂林事務所を設立し、設計に当たります。

台北は、地下水位が高く、軟弱な地質で、新築ビルの地下工事により隣接建物が倒れたり、周辺道路が崩れ落ちたり、そうしたことを防ぐ工事を行い、1977年13階建ての栄華ビルを完成。同郷の友人で、当時台北市長だった李登輝さんが、78年台北副都心計画を発表。

「郭さん、台湾の近代的都市造りに協力してくれませんか」

李登輝さんは、岩里政男という日本名で京都大学に学び、国を守るため兄弟共志願兵となり、日本帝国軍人として高射砲部隊に属し、陸軍少尉でした。

「私は、昭和20年まで日本人でした」と言われ、台湾大学卒業後、米コーネル大学で博士となり、台北市長時代に霞が関ビルを見て、台北発展のためにと郭に街づくりを依頼。

「台北駅裏の、日本時代の小学校校舎を使用している台北市役所を、東の兵器庫跡地に移して、副都心の中心とし、西の総統府と向かい合わせ（5km隔てて）台北の東西の軸を造ったらどうですか」

郭の提案に李登輝さんも大賛成。こうして都市計画がスタート。市・政府本庁舎を建設するとともに、82年には台湾初の100メートルを超える台湾電力ビルの設計かつ建設指導。新台北

駅も郭の仕事でした。

93年台北駅前に地上51階、地下7階という新光三越ビルを自ら設計。97年には70階建ての台北国際金融センター

ビルに携わるなど、李登輝さんと共に台湾随一の行政・経済・文化・商業の都市づくりに尽力。信義副都心ではメイン道路の歩道片側に幅10メートルのグリーンベルトを設け、歩行者の利用出来る緑の歩道、沿道に店舗が並ぶ歩行者専用の長さ1kmに及ぶ屋外ショッピングモールを設けて、各街区を連結し、歩行者が楽しく快適に往来できるように配慮し、新宿副都心の短所を除き、長所を取り入れ、信義副都心は計画から40年近くを経て今日、台湾で最も先端を行く賑やかでファッショナブルな複合都市センターに成長。

日本は平均12階建て、13階建てが多いが、台湾では25階建てが合理的で使

いやすいと多くの建設に協力。84年には、60階建てのソウル大韓生命本社ビルを建設。

大好きなゴルフのクラブハウスは日本でもいくつも手掛け、89年頃台湾もゴルフ場建設ラッシュとあって、台湾人のプレー習慣を考慮しながら、自身の理念や構成を提案し、クラブハウスを完成に導きました。

台北の都市づくり

石原慎太郎当時東京都知事が、台中の地震視察の時、郭も同行。

台中は暑い所なので、2階が張り出し、それを柱で支え、その下がアーケードのようになっていてそこを通る。

「倒れた建物は、鉄骨が5本しか入っていない。倒れていないのは、10本は入っているでしょう。これは監督不行

き届き、行政の責任である」と、総統になつてゐる李登輝さんに激しく進言されましたと、石原知事は「震災に対する強度について」の中で書かれてゐる。

台南で大きなマンションが倒れたのも、壁の中に石油缶が入つていたり手抜き工事、監督不行き届きによるもの。横浜でもマンションにおおきなずれが生じたのも基礎工事の手抜きから。

89年、大使館ともいえる台北駐日経済文化代表處は、アメリカのホワイトハウスに対して、東京のホワイトハウスにと、建物全体に白いタイルを貼り付け、屋根と壁との間に金色のベルトをはめ込み、所在地白金台しろかねだいという地名にふさわしい建物です。

コーディネーターとしての大きな力

各部門の専門家を集めて、まず建築内部の必要な機能を満足するよう、先に平面図を考え、断面を考え、更に立体面と全体の形を決める。こうして整然とした結果がもたらされ、奇抜さは

ないが長期の使用に耐え、使いやすさを持続させる。

日本に来て60数年、ほとんどが大規模なプロジェクト。多くの企業・専門家が一緒になつて仕事をする。一家言を持ち、力を持った人たちがそれぞれ主張したらうまくいきません。それをいかに一つにまとめていくか。ここに郭茂林のコーディネーターとしての大きな力があつたればこそ、成功があつたのです。その最たる仕事が新宿副都心づくりでした。(前号にて詳細紹介)

今や協同企業体でのプロジェクトが多いだけに、コーディネーター役が重要です。

「好い土俵でないと、好い相撲は取れない。建築も敷地が整つていないと、いくら努力しても好い建物が建たない。土地づくりが大事」というのが持論で、注文主と対等の関係を築くと共に、建物の設計を始める前に、好い敷地条件を獲得することを重視していた。ですから、決められた土地での建設には、好い敷地にするにはどうしたらよいか。特に強度・安全面に強い意識を持ち、苦心したのです。

東京タワーは、パリのエッフェル塔

を模したと一部に批判があつたが、安全面からあの形が一番であると、以後のタワーは同様設計が多いが、東京スカイツリーは敷地上に制約があり、担当した設計士はこれまでと違つた形の設計にし、さぞ苦心があつたことでしょう。

郭の業績は、建物以外にも各地の再開発、リニューアル、ショッピングセンター総合アドバイザーなど数え上げればきりが無いほど。どんどん新しい技術を実現し、日本と台湾で建築にまつわる多くの賞を受賞。

早くからアジアの時代到来を思い描き、「日本、台湾、中国、韓国、ベトナム、インドと、これまでも、これからもアジアはひとつなんだ。今後のアジア諸国の発展を支えていくのは、構想力と技術力だ」と認識し、強い信念を持ち続け、「全力で生きてゐる限り、必ず明日は来る」と。

台湾に生まれ、日本に帰化し、更なる発展を目指して歩み続け、高齢にもかかわらず台湾東部のリゾート開発の夢を抱きつつ、平成24年は、いつもより桜の開花が遅く、桜の花を愛した茂林を称えるかの如く、命日の4月7

日、桜満開の満月の夜九十一歳の長寿をまつとうして帰らぬ旅路におもむきました。庭の桜が悲しむが如く、ハラと風に舞つたのでございました。

現在日本では、新たな工法により木造の耐震性や耐火性の弱さが克服されるようになり、木造のビル建築が注目されるようになりました。寺院本堂も木造で建設可能となり、日本の林業再生になればいいですね。

茂林さんは、国内の材料をどんどん使われたのですから、ご健在ならば木造高層建築にもきつと取り組まれたことでしょう。

2020年には、東京駅前開発で高さ390メートルのビル。渋谷駅前も再開発で、建設中を含め9棟の高層ビル建築予定があり、これもひとえに超高層建築第一号震が関ビルを世に送り出し、超高層ビル時代への道を拓き、日本が世界に肩を並べる要因となつた郭茂林の力があつたればこそと申せましょう。「僕一人では何も出来ない、皆の力を合わせただけ」という、巨塔の男と称された郭茂林の一席。■